
リリカルな次元世界の中心で

能の無い鷹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルな次元世界の中心で

【Nコード】

N4066K

【作者名】

能の無い鷹

【あらすじ】

色々あって戦争で特攻して死んだ主人公。気がついたらそこはミッドチルダ。これからどうなっていくのか。作者も知らん（笑）
リリナの二次創作です。二次創作は初めてで、文才無いです。かなりおかしいので見る人は注意。

注意書き的な何か

えー初めまして。能の無い鷹です。

主人公が最強な異世界ファンタジー的なものを書いていたのですが、気分転換も含めてなんかやろうと思い、書きはじめました。

この作品を読む場合は以下の注意点を良く読んでから読む事をお勧めします。

その1 作者は二次創作は初めて。

その2 原作のアニメ見てない。知識のほとんどは他のSSから。

その3 オリ主もの。

その4 オリキャラやオリ設定がある。

その5 原作に出ているキャラは口調がおかしかったり色々と崩壊してたりする。

その6 作者に文才は無い。欠片も無い。

その7 主人公が最強だったりするかもしれない。

その8 作者の文章能力の都合で大事な部分が飛ばされたりするかもしれない。

その9 ものすごく遅筆。で、駄文。

その10 物語のほとんどが作者の脳内保管になるかもしれない。

その11 プロット？なにそれおいしいの？

その12 ジャンルとしてはオリ主転生リリカルな世界に介入、の予定。予定は未定。

以上の点をふまえて、「あまりに暇すぎるから見てやる」「駄文を見るのが好きなんだ」「なんでもいい、とにかく読ませろ」という方はお読みください。

最後に、作者は非常に単純ですので、応援されたらものすごく喜びし、批判されたらとんでもなく落ち込みます。あまりいじめないでやってください（オイ

はじまり（前書き）

ついにやっちゃった。二次創作。

文才は無いし、これおかしいだろと思う場所がかなりあると思うので、読む人はそれなりに覚悟してください。

文章がやばい。

はじまり

ここは、何処だ？

目の前は真っ暗で何も見えない。仰向けになっている事は感覚でわかる。

周りを見ようとして、首が動かない事に気付く。その事に驚いて体を動かそうとしたが、全く動かない。

どうなってるんだ？

自分は先程まで、兵として戦争に参加して戦っていた。

自分のやる事は、戦闘機に乗り敵へ突っ込む。つまり特攻。

その特攻をして、敵の本部に衝突し体が引き千切れるような痛みを

感じながら意識を失った。

そうして起きたら、目の前は真っ暗で体は動かない。全く意味が分からない。

しかし自分は死んだはずだ。ならばここは天国？ いや、生前ろくな事してないから地獄か。

ここが地獄だろうが天国だろうが別にいい。ただ、体が動かないのがいただけない。

はあ、困った。

こんなに暇だと、あの後どうなったか、戦友はうまくやったのかなどが気になる。

殺した敵兵の恨みの声が聞こえてくる。

家族が無事かが気になる。

あゝやめだ。なんとかして思考を別の事に集中させよう。

もう少し体が動くか試してみるか。暇だし。

力を入れる。動かない。

口を開けようとする。開かない。

色々と試していく。

疲れた。止めだ。

全く動かない。感覚はあるけれど、動かない。

やる事無いし、寝るか。起きていてもよけいな事を考えてしまう。

おやすみ。

「残念ながら、もうお目覚めの時間だよ」

はじまり（後書き）

さて、ここで爆弾発言。作者はリリなのアニメは一期の途中までしか見てません。タイトルは特に意味がないという罫。ほとんどの知識は他のSSとかで知りました。

さあこれからどんどんひどくなるぞ！

感想とかあつたら嬉しいです（この時点で何を言えと）

はじまり その2（前書き）

作者は遅筆で文才無いです。

今回もこれから駄文なのでそれを忘れないで読んでください。

そして、毎回短いです。

はじまり その2

うつ。

いきなり、視界がクリーンになった。かなり眩しい。

周囲の明るさになれてくると、まず天井が見えた。真っ白で病院にあるそれと似たような感じだ。

天井からまっすぐ視線を降ろす。見えたのは気持ち悪いくらいに二ヤけてる白衣に白髪オスの人間

そいつはひとまずスルーして白い病院とかに良くありそうな固いベツドに横たわっている自分の体を見る。

病人が切るような白い服を着てるな下着も着てるなってアレ？ 体をよく見てみる

・・・・・・は？

体がおかしいんですが。小さいんですが。ていうか明らかに自分じゃないんですが。

目にかかっている前髪、銀髪。元は黒だったんですが。そもそも目に

かかるほど長くなかったんですが。

肌、真っ白。ついでに肌触り良さそう。元の俺、黒っぽい日に焼けた感じの肌。お世辞にも肌触りが良いとは言えない。むしろ逆。

身長、よくわからないが140くらい？元の俺は180はギリギリ越えてたんですが。

アレルギー？ なんてだろう。俺もしかして女の子？ いやそんなはずは・・・無いと思う。胸に起伏は無いし。下、ついてるよね？ 後で確認しなきゃ。

それに、一応二十歳は過ぎてただけだなー。この体は頑張っても逆立ちしてもトリプルアクセルしても極大消滅呪文を唱えても12〜15くらいにしか見えない。

困るな。非常に困る。元の俺はまだ、どーてーなのに。卒業してないのに。今になって心残りが・・・。

と、色々と確認するのは時間が出来てからにして、さっきのオスは・・・うわまだニヤニヤしてる。きもっ。

体は動くようなので、あまり関わりたくないが目の前のオスに話しかけてみた。

「おい、お前。ここはどこだ？ この体は「ブシャツ！」っない？」

おいおいこの野郎。鼻血吹き出しやがりましたぞ。

「さ、さすが試作品にして完成品。すさまじい」

「は？ なにがだ？」

ブシュッ

「く。よ、ようやく目覚めたな、試作品にして完成品よ。ぼ、僕は君の製作者の一人だ」

鼻血止めるよ。ていうか試作品にして完成品？ 製作者？

「これは作られたっていうことか？」

「グフッ。そ、そうだ。君は僕たちが作った」

そうですか鼻血なんとかしろ。俺は死んだはずだから、憑依したのか？ この作られた体に。そんな感じにしか考えられない。

「試作品にして完成品とは何の事だ？」

「ぎ。試作品にして完成品とはそのままだ。試作品とはある目的の為に作られた人造魔導士の試作品。完成品とは……」

ま、魔導士……いきなりぶっ飛んだな。しかも人造とか。

完成品の方は何だろう。

「完成品とは、完璧な『男の娘』製造計画の完成品の事だっ！！！！」

ババーン！

俺、もうついていけない。鼻血を出しながら輝いてるよ。この変態。ただ俺が男だという事は分かった。それだけでかなり落ち着いた。変態は……黙らせるか。拳で。

「いい加減、黙れ！」

ベッドから飛び出して変態の鳩尾を思いっきり殴った。

変態が吹っ飛んだ。壁に激突した。

どうやら俺は化け物になったらしい。どうやったらこんな細腕で成人してる男を吹っ飛ばせるというのだろうか。

変態は恍惚とした表情でこちらを見つめている。

潰しますか？

YES
↑

NO

変態に歩いて近づき、その男にとって大事な、男である証のそれを、本気で踏み潰した。うえ、感触が生々しい。

悲鳴を上げる前に気絶したようだ。ビクビク痙攣しているのが気持

ち悪い。

さて、なんかやっちゃったけどどうしよう。

はじまり その2（後書き）

どうしてこうなったんだろう。

感想とか、意見とかあつたらください。
作者は嬉しくて太陽に向かって吠えます。

はじまり その3（前書き）

変な事が書いてあつたらオリ設定だと思ってください。そうしない
とこれから先どうなる事やら・・・

さて、今回も駄文ですのでお覚悟を。

はじまり その3

さて、どうしよう。変態はこのまま放つといっても大丈夫そうだ。

口封じに殺した方がいい気もするが、俺は殺すのが好きなキチガイじゃないから殺さない事にする。甘いな。

気を取り直し、とりあえず部屋を見回してみる。

白い壁に天井、白いベッド、あとは、ドア。

見事に何も無いな。

部屋を出るしか無いか、っとその前に。

変態に近づいて白衣のポケットを漁る。ここから出るにしても、何も無いんじゃないかとない。

お、なんかあった。これは、なんだ？

何か良く分からない半透明の銀色の玉が出てきた。他には何も出てこなかったのだ、それを持って部屋を出る事にする。

スライド式のドアに耳をつけて外に誰かいないかを確認める。

この体になったおかげで五感や身体能力が比べ物にならないほど高くなっているため、ドア越しでもはっきり分かる。

居ないのを確認すると、そつとドアを開ける。通路のようだが誰もいない。

どうやら俺の居た部屋は通路の突き当たりの場所らしく、道は一つしかない。

音を立てないように注意しながら歩く。

ドアがある度に立ち止まり、耳を澄ます。便利だなこの体。男の娘なのが気に入らないけど。

4つ目のドアで、音が聞こえた。人の声みたいだ。

居るのは恐らく1人。俺を作った奴の1人かもしれないので、入る事にした。

いたのは白衣を着た紫色の髪をした男。それとよくわからない機械がある。

気付いてるかもしれないが、出来るだけ音を立てずに近づく。

距離が後一メートルというところで、男は唐突にこちらを向いた。やはり気付かれていたらしい。

「初めましてというべきかな？試作品にして完成品。わたしは君を

作った者の1人、ジェイル・スカリエツティだ」

「初めましてというべきだな、ジェイル・スカリエツティ。俺はお前に作られた者。名前はまだ無い」

とりあえず真似して返してみた。

「ハハハ、面白いねえ。君は本当に目覚めたばかりなのか？ 普通は目覚めたばかりでそこまでしつかり行動できないはずなんだが」

「俺は普通じゃないんでね。まあ色々と聞きたい事もあるが面倒くさいので一つにする」

「ふむ。なにかね？」

「ここから出るにはどうすればいい？ 早く外に出たいんだが」

ついでに言つと月が見たい。なんか癒されるんだよね、月。

「全然かまわないけど、なぜかね？ 理由がよくわからないな」

「それは外を見た事が無いからだ」

こつちの世界の外はね。魔導士とか言つてたし、元の世界に人造人間を作れるほどの技術は無かったし。まあ夢を見ているという可能性は否定できないが、こんなリアルな夢見た事無いから多分違うだろう。

「まあいいけど、他に聞きたい事は無いのかな？」

「なくはないが、早く外に出たいんだ。別にこういう空間も嫌いじゃないけど」

「なら、まず出ようか」

そう言つてジェイル・スカリエッティはよくわからない機械を動かして、そこからなんか抜き取つてドアの方に向かった。

「さあ行こうか」

「なぜお前も行く気満々なんだ？道さえ教えてくれれば1人で行く」

「君には聞きたい事があるからね。なぜそこまで意思がはっきりしているとか、ね」

そう言つてこちらを見る。顔は笑っているが目はこちらを探るように見ている。

「外に出してもらえれば文句は言わない。聞きたい事があるなら別に答えてやってもいい」

「行こうか。それとわたしの事はドクターと呼んでもらつて構わない」

「わかった。ドクター」

そう言つて通路を歩き出す。そこから外に出るまではお互い無言だった。

「ここが外の世界か……」

出たところは森の奥深く。見つかったらやばい研究でもしてたのだから。俺自身がその研究の成果なのかもしれないな。

月は……見えた。2つ。だけどやっぱり癒される。一応礼言
つとくか。

「ありがとう」

「感謝されるほどの事でもないよ。さて、では質問に答えてもらおうか」

来たな。隠すべき事も別に無いし、いいか。

「構わない」

「では、君は何者かね？」

「俺の体はお前に作られた。俺の精神、記憶はここじゃない別の世界のものだ。俺はその世界で死んで、目覚めたらこの体に入っていた」

「少し特殊な次元漂流者といったものか。君のいた世界に魔法はあったかね？」

「そんなものは無い。銃とか戦闘機とかそういうものはあったけど。次元漂流者ってのは何だ？」

「なるほど、質量兵器があるという事は管理外世界のどれかか。君の質問はこれからまとめて答えるよ」

と、いうことで色々教えてもらいました。そして、なぜかドクターのラボに行くことになりました。

ちなみにさっきの施設に人が殆どいなかったのは、必要ないからだそうだ。実際、変態とドクターしかいなかったらしい。

あ、銀の玉について聞くの忘れてた。それ以前に変態放置だけいいのだろうか。別にどうでもいいけど。

はじまり その3（後書き）

スカさんの口調はこれでいいのだろうか。心配だ。

次回、ついにデバイスが登場。オリ設定が爆発するかも。そして作者の傷が広がる。

はじまり その4（前書き）

ああ、もう色々と駄目だ。

こついの書いてる人がいかに偉大かが分かった気がする。

まあ、とりあえずごめんなさい。

はじまり その4

よう、俺だ。

今、ドクターのラボの中にいる。

ラボにつくまでにここの常識もたいてい身に付けたし、多少難しい事もきついが分かるようになった。

記憶力がいいのが役に立ったな。ドクターにも少し驚かれた。

この体の事はラボに着いてから俺専用のデバイスも含めて説明すると言われた。

デバイス、一応どういふものかは聞いたが実物を見てないので今一よく分からない。

魔法を使う為の、魔導士、騎士が共通して持っている、この世界における魔法の杖みたいなものらしい。

インテリジェントだったりストレージだったりと色々あり、イメージがどうも・・・

今まで魔法の無い世界にいた弊害か。

俺がなぜここまで魔法を受け入れているかというと、ここにくるまでに一回転移したからだ。

あんなのを身を以て経験すれば嫌でもわかる。

で、ついさつき、ドクターにあの銀の玉見せたら狂喜乱舞して、それを持って研究室に閉じこもってしまった。

取り残された俺はというと………

俺と同じくドクターに作られたドウエさんとトーレさんにお持ち帰りされた。

ドナドナ……

経緯はこうだ。

閉じこもる前にドクターが、2人に自分がない間相手をしていてくれと言ったのだ。

そして俺の完成品な顔がお気に召したのか連れ去られてしまった。逃げようにも相手は2人でしかも戦闘機人。無理ゲーです。

もう1人のウーノさんはドクターとともに研究室へ。

だれか、へるぷみー。

「まずは体を洗淨しないとね」

「そうだな」

「じゃあ1人で行ってきます」

「場所分らないでしょ」

「ぐっ」

「では、早く行こうか」

という会話があつたとか無かつたとか。

もうお婿に行けません。グスン。

あーそうそう。みんな妙にフレンドリーだと思ったら、前からこの計画（俺をつくる）を聞いてたらしく、楽しみにしてたそうなの。

技術も戦闘機人と似たところがあったりして（筋力とか）姉弟に近い存在らしい。

予想以上に俺が完成品だったのもあわせてこのようになったと。

一部非常にきにくわない部分があるが、気にしたら負けだと思う。
いや負けだ。そうだと言ってくれ！

なんやかんやあって、半日くらい（ラボについたのは朝）たったら
ドクターが出てきた。

銀の玉がどうなったか聞いてみた。

「結局あの玉はどうなったんだ？」

「あれかい？君のデバイスにとりつけたよ」

ハア？俺デバイスは知識しか知らないけどそんなの聞いたことない
んですが。

「わたしは天才なのでね」

わーすごいですねー。

「で、俺のデバイスは何処にあるんですか？」

「きみのデバイスはこれだ」

そういつて取り出したのは、小さい黒い翼のネックレス。羽の根元
の部分に小さくなった銀の玉がついてる。

「話しかけてみるといい。君とデバイスについてはそれから聞くよ
うに」

ドクターは、わたしはまだやる事があるからね、と去っていった。

とりあえず話しかけるか。

「よう。きこえてるか？」

『yes , good morning , my master』

機械的な女性の声が聞こえてきた。

「ああ、おはよう。なら俺と同じ言葉で話してくれ」

『はい、わかりましたマスター』

正直英語は苦手だからな。出来ないわけじゃないけど。

「ありがとう」

『礼には及びません。それより、名前を付けてくれませんか？』

「分かった。じゃあお前は……」

何にするか。困ったな。決めてなかった。なにがいいか。

銀の玉の部分がなんか光ってて、星みたいだな……とあった。
いいのあった。

「お前は、ステラだ」

『ステラですか。いい名前をありがとうございます、マスター』

気に入ってくれたみたいだし良かったな。え？名前が単純すぎるだつて？いいだろ、ステラ。確かにイタリア語で星って意味だしそれで決めたけど。

名前も決めたし、よし、早速起動するか。

「いきなりで悪いが、ステラ、セツトアップ」

『わかりました』

初起動。

出来たのは、大鎌。色は基本的な部分が銀色で刃の部分が黒く、銀の玉、ステラ本体は刃の付け根あたりについてる。

起動したはいいけど、どうしよう。

そっぴやドクターがなんかステラに聞けって言ってたな。それ聞かか。

「ステラ、悪いが俺とお前について話してくれるか？」

『わかりました、マスター』

それにしても固いな。起きたばっかだから仕方ないか。

じゃ、聞きますか。

はじまり その4（後書き）

面倒なところは飛ばす！それがおれのジャスティス！

ただ単に知識が足りないだけですけど。

こんなゴミ虫生きてる価値無いですよ、すいません。

感想とか、評価とか、くれると作者はフルドライブします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4066k/>

リリカルな次元世界の中心で

2010年10月14日13時05分発行